

東京農業大学における オホーツク学の取り組み

視点論点



黒瀧 秀久

東京農業大学生物資源開発研究所
オホーツク実学センター長教授

1 オホーツク学までの経緯

東京農業大学生物産業学部は、1989（平成元）年に網走市に開設された。現在、1学部4学科、大学院博士前期・博士後期の課程をおき、1700名弱が網走市のオホーツクキャンパスで学んでいる。学生のほとんどは北海道外の出身者であり、北海道での4年間の学生生活を謳歌している。

本学部が網走市に開設以来現在までに取り組んできた調査・研究では、ロシア（サハリン州）や中国東北部、モンゴルなどで主として寒冷地・乾燥地の農学研究を継続的に実施してきており、その研究交流の結果、本学とサハリン農業科学研究所、中国農業大学、モンゴル国立大学なども研究交流や姉妹校締結を行っている。こうして、おおよそ20年の調査・研究蓄積を体系立て学生教育に還元しようというのが「オホーツク学」である。

2 現代GPへ採択

先に述べたような学部開設以来のオホーツク学研究の蓄積に加えて、現在まで本学が積極的に取り組んできた網走ビールやオホーツクマス寿司をはじめとした地域活性化に資するような新たな生物資源の有効利活用による製品開発がある。このような学術的に加えて製品開発の蓄積を総合的に教育プログラムとして編集し、従来までの座学や実験中心の教育から実習などを主とした本学の学是でもある「実学主義」に則した形での新たな教

育スタイルに基づいて、平成17年度に文部科学省から「地域連携によるオホーツク学の展開」として現代GP^{*}に採択された。これは、北海道の大学においては初期の採択でもあった。

さらには、本学として初めて採択された現代GPでもあり、非常に規模の大きな教育プロジェクトでもあることから、事業をスムーズに展開・推進できるように2006年10月より、オホーツクキャンパスの生物資源開発研究所内に「オホーツク実学センター」を設置し、ここが主管となりプログラムを実施している。

3 地域連携によるオホーツク学の展開

平成17年度より4年間の予定で「地域連携によるオホーツク学の展開～コンソーシアムを基軸としたオホーツク学の展開～」が始まった。この教育プログラムの特徴は、

- (1) 地域が学校である。
- (2) 現実には実学研究テーマの宝庫である。
- (3) 実学とアカデミズムの融合は新たな研究者の評価を生み出す。
- (4) 現場体験の積み重ねが学力と人間力を高める。
- (5) 文理融合的研究教育が社会的ニーズとシーズを生み出す。

という5つのモットーを掲げ、実学的かつ学科横断的に、学生自身が関心のあるテーマ別に少人数教育で学べるということである。さらには、本学の3、4年生の学生のみならず、広く網走市を中心に一般市民へプログラムが公開され、学生と市民が共に受講している点にも特徴がある。

オホーツク学の教育プログラムとして、現在5つのコースが設置されている。

- ① 「環オホーツク海圏広域交流教育プログラム」では、オホーツク地域を取り巻くロシア、中国、モンゴルなどの国々との文化や交流をはじめ、オホーツク海の水産資源、サハリンプロジェクト、地球温暖化に伴う流水への影響などについても講義の対象としている。
- ② 「知床世界自然遺産エコシステムマネジメント教育プログラム」においては、世界自然遺産に登録された知床を主なフィールドとしてエコシ

^{*} 現代GP：現代的教育ニーズ取組支援プログラム（文部科学省）。社会的要請の強い政策課題に関するテーマを設定、各大学、短期大学、高等専門学校が計画している取組から優れた取組を選びサポート。高等教育全体の活性化を促す。

システムについて学んでいる。近年「エコシステムマネジメント」が注目されているが、観光と環境の共生という観点から知床をモデルとした環境マネジメントを理解することがこのコースの目的である。

③ 「流域生態系連携活性化教育プログラム」では、河川の上流域から下流域、ひいては海洋までの川の流域にスポットを当て、総合的に理解しようというプログラムである。すなわち、川上の山林の減少や流域の住民からの生活排水は、河川や海洋への影響を及ぼしかねない。こうした背景を踏まえて、このコースにおいては、現在、網走川をモデルとして「上流から下流までの流域生態系循環」の実現に向けた対策について学んでいる。

④ 「新規就農ビジネス教育プログラム」にあつては、近年、少子高齢化がすすむ地域経済にあつて、その農業部門における若手後継者の問題が指摘されている。そのようなことから、新たなビジネスとしての農業の可能性について学習しているものである。それに加えて、先述したように本学部の学生の90%が道外出身者で占められていることから、北海道型の大規模農業を体感し理解することができる。本学の付属施設である網走寒冷地農場は、全国の農業系大学が有している農場の中で、実験農場という側面に加えて、唯一のビジネス農場として地域農業の構成員として実際に稼働しているものである。

⑤ 「エコ・グリーン・マリン・ツーリズム教育プログラム」は、近年道内でもすすんでいるツーリズムについて学ぶ機会を提供したプログラムである。北海道においても農家レストランや観光農園などに広がりを見せている。そのため、コースにおいては、森や海に囲まれた網走市をモデルとして、ツーリズムとしての資源の発掘を実際に体験することを通じて学ぼうというものである。これによって、新たな観光資源として網走市民にもほとんど知られていないスポットが掘り起こされるなどといった、副次的な効果も見られる。

以上、大まかに各コースの内容について見てきたが、これら5つのテーマはそれぞれ異なつても、「環境」という共通の切り口が存在していることは明白であろう。この教育プログラムでは、実体験に基づいた教育を行いつつも環境について肌で感じて、それを学生が実践しているのである。

4 コンソーシアムの役割

本G Pの副題に「コンソーシアムを基軸とした…」とうたっているが、それについてここで見ていくこととしよう。ここでのコンソーシアムとは「大学と地域が共同で事業を行うこと」と定義されるが、本学においては先に見たように、網走ビールやマス寿司など、大学と地域企業との間で地域に豊富にある生物資源を活用した共同開発が行われている。つまり、大学の研究と地域産業、企業とがコラボレーションし、新たな地域の特産品を開発に積極的に取り組んできている。

これらの事業を通じて、本学でも地域企業や産業とのつながりはあるものの、それ以外にも先の章で述べた各コースに外部コンソーシアム委員を2〜3名程度委嘱している。

これは、各コースのテーマに見合った知識を有している網走市民を中心にアドバイザーとして問題意識の共有を図ろうという狙いがある。このコンソーシアム委員と問題意識を共有できると、学生から提案があつた内容を基に地域活性化に結びつけられるというメリットが考えられる。

5 今後も地域と環境をテーマに

以上で見てきたように、本G Pでは環境を共通のテーマとしつつも、オホーツクキャンパスを取り巻くフィールドを中心に様々な内容について学んでいる。文部科学省からの補助事業としては今年度で終了するものの、今後も地域と環境をテーマとして、一層の充実を図っていく次第である。とりわけ、本事業は非常に広い範囲であることから、オホーツク学の「総論」として位置づけられる。その「各論」として、平成19年度より「エゾシカ学から学ぶ環境共生と地域産業の連携」で現代G Pが採択された。これはエゾシカを深く掘り下げることでオホーツク地域の環境と地域の生物資源の有効利活用について学ぼうというものである。さらには、社会人中心の農業系の専門職の育成（農業MBA）の開設をも視野に入れている。

profile

黒瀧 秀久 くらたき ひでひさ

1957年青森県生まれ。'79年東京農業大学農学部農業経済学科卒業。'84年同大学院農学研究科博士後期課程修了。'83年（財）林政総合調査研究所、'85年東京農業大学。2005年同生物産業学部産業経営学科教授、生物資源開発研究所オホーツク実学センター長を経て、'08年東京農業大学オホーツク学術情報センター長。（財）農村開発企画委員会委員、オホーツクテクノプラザ理事、オホーツク地域自治研究所常務理事など公職多数。著書に、「日本の林業と森林環境問題」八潮社（単著）ほか。